令和８（２０２６）年１月26日

保護者の皆さまへ

吹田市立千里第一小学校
校長　岡本　公助

令和７年度全国学力・学習状況調査の分析について

本年度、６年生を対象として「令和７年度全国学力・学習状況調査」を実施し、９月上旬に個人ごとの結果をお返ししました。また吹田市でも、今回実施した調査結果の概要を吹田市のホームページを通じて公表しております。

この調査は小学校の最終学年のみを対象とした調査であり、教科も国語、算数、理科に限られております。測定されたものは学力の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。そのことをまず踏まえつつ、調査によって得られた課題を明らかにし、その改善に全力を注ぐことが、調査本来のねらいであると考えています。

対象となった６年生には、得られた課題をもとに、よりきめ細やかな指導を進めるとともに、学校全体として課題に応じた学力向上につながる具体的な指導方法の工夫改善も図ってまいります。各ご家庭におかれましても、以下の分析結果をもとに、今後の家庭学習の指針として、参考にしていただきますようお願いいたします。

１．教科に関する調査の分析

◆国語＜概要＞

・「話すこと・聞くこと」は全国値を下回っている。
・「書くこと」は全国値を下回っている。
・「読むこと」は全国値を下回っている。
・学力の分布に関しては、平均正答数は全国値を下回っている。

◆国語＜各領域における成果と課題＞

【話すこと・聞くこと】

・「話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる」は、全国値と比べてやや上回っている。
・「自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる」は、全国値と比べて下回っている。
・相手の考えと比較しながら、自分の考えを比較することのできる児童の割合は高い傾向にあるが、会話文に書かれた内容を誤って捉えた児童がいたと考えられる。

【書くこと】

・「書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができる」「目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる」は、全国値と比べて下回っている。
・「図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる」は、全国値と比べて下回っている。
・設問で「二つの図を並べている」ことは捉えることができていたが、図と言葉をどう関連付けているかを捉えることができなかった児童がいたと考えられる。
・文章を詳しく書くという意識はあるものの、目的に合わせて何を優先的に記述すべきかを考えたり、説明に必要な言葉や文を取り上げたりすることができなかった児童がいたと考えられる。

【読むこと】

・「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる」は、全国値と比べてやや下回っている。
・「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる」

「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができる」は全国値と比べて下回っている。

・納得したことを資料から言葉や文を取り上げて書くことはできているが、その理由を別の資料から言葉や文を取り上げて書くことができなかった児童がいたと考えられる。

・「【資料１】を読んで納得したことをまとめる」という目的を意識することはできているが、納得した理由となる情報を【資料２】【資料 3】【資料 4】の中から見つけることができなかった児童がいたと考えられる。

【言葉の特徴や使い方に関する事項】

・「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができている」は全国値を下回っている。

【情報の扱い方に関する事項】

・「情報と情報の関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる」は全国値を下回っている。

・話し合った内容を短い言葉でメモに記録したり、内容を線でつないで流れを整理したりしていることは理解できていたが、語句と語句の関係を理解することができなかった児童がいたと考えられる。

◆国語における今後の改善点

・【話すこと・聞くこと】について、児童は、立場を明確にして理由や根拠を示すことはできるが、別の意見に疑問を感じて質問したり、異なる意見の良さを自分の意見に取り入れたりするのは苦手な傾向にある。ベン図や Y チャートといった思考ツールを活動内容に合わせて取り入れるなど、１つの題材に対して多様な視点から考えを深められる機会を増やしていく。また、目標やポイントを絞って焦点化し、児童が主体的に話し合いに取り組めるような授業づくりも目指す。

・【書くこと】について、児童は、段落ごとの要点を抽出することはできるが、段落ごとの要点をつなぎ合わせて文章に要約するのは苦手な傾向にある。特に、つなぎ言葉の用途に関する理解が浅く、実際に使用する機会を増やす等、児童にとってより実感の伴った書く指導を設定する必要がある。また、それに合わせて「例示する」「図示する」「対比させる」といった技能の定着も目指したい。そのために、友だちと書いた文章を読み合って比較する、学習成果物を第三者が読んで評価するといった経験を増やしていきたい。

・【読むこと】については、ICT 機器も活用して、思考の「見える化」を目指す。本文で書かれた文章に対して、児童が抽象的に理解したことを、図式化(マインドマップやフローチャート等)や内容ごとに色分けする等して、目に見える形で共有できるようにする。また、本校の研究におけるユニバーサルデザインの三つの視点「視覚化」「共有化」「焦点化」の視点を継続して学習指導に取り入れることで、児童が「わかる・できる」よう、授業づくりを工夫配慮していく。

・【言葉の特徴や使い方に関する事項】については、学習した漢字を文の中で正しく使えるように、デジタル教科書などの学習教材も活用しながら指導していく。また、既習の漢字は日常的に活用できるよう指導していく。

・【情報の扱い方に関する事項】については、資料から読み取ったことを自分の考えと結びつけることが苦手な児童には、「だから」「～なので」といった情報と情報との関係を表す語句や、「思う」「考える」のように思考そのものに関わる語句を例示するなど、児童一人一人の学習の状況を把握し、その状況に応じて適切な指導を行う。また、言葉に対する対象が何なのか、文学教材や説明的な文章の学習の中で共有するために、オクリンクやムーブノートを活用して、文中の言葉が持つ効果について話し合う機会を取り入れていく。

◆算数＜概要＞

・「測定」の領域は全国値をやや下回っている。

・「図形」「変化と関係」「数と計算」「データの活用」の領域は全国値と比べて下回っている。

・学力の分布に関しては、平均正答数は全国値を下回っている。

◆算数＜各領域における成果と課題＞

【数と計算】

・「小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることができる」は、全国値をやや上回っている。

・「異分母の分数の加法の計算をすることができる」は全国値を上回っている。

・「分数の加法について、共通する単位分数を見出し、加数と被加数が、共通する単位分数のいくつ分かを数や言葉を用いて記述できる」は全国値を下回っている。

・通分については記述しているが、共通する単位分数 1/12 や 3/4 と 2/3 がそれぞれ共通する単位分数のいくつ分かの記述ができなかった児童がいたと考えられる。

【図形】

・「基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できる」は全国値をやや上回っている。

・「平行四辺形の性質をもとに、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができる」「角の大きさについて理解している」は全国値を下回っている。

【測定】

・「はかりの目盛りを読むことができる」は全国値をやや上回っている。

【変化と関係】

・「伴って変わる二つの数量に着目し、必要な数量を見出すことができる」は、全国値をやや下回っている。

・「10%増量」は理解しているが、増量後が増量前の何倍になっているかを表すことができなかった児童がいたと考えられる。

【データの活用】

・「目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる」は、全国値をやや上回っている。

・「簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができる」は全国値を下回っている。

◆算数科における今後の改善点

・【数と計算】では、構成する単位分数を正確に捉えるために、数量やその関係を、できるかぎり一人ひとりが言葉や図表や式などを用いて表現できるような授業づくりを行う。既習の内容であっても、「わからない」「なぜそうなるの」の声を大切にし、計算の手順を振り返ったり、学習する単元との共通点を探ったりしながら、児童の課題や関心に寄り添った授業を展開する。

・【図形】では、低学年のうちから、辺の長さや角の大きさといった特徴やその図形の持つ機能などに着目して、どのような見方で考えたかを共有したり、根拠を示して課題解決の仕方を交流したりするなど、図形に対する見方・考え方と関連付けさせる工夫を取り入れていく。また、作図の仕方などをイメージをすることが困難な児童がいることを想定し、デジタル教科書など ICT 機器を活用した授業作りを行っていく。

・【変化と関係】では【数と計算】の割合の指導と同様に、問題文から数値を見取り、公式に当てはめるだけでなく、言葉や式、図、表、グラフを用いて表現する経験と時間を保障することが大切であると考える。問題を読み、表現し、交流して学ぶ機会を繰り返し持つことで、知識や技能だけでなく、考えたり判断したりする力が定着するよう工夫していく。また、単元の初めの導入や学習事項を意図的に日常生活と結びつけるなどの工夫を行い、学習と生活を結びつけることができるよう指導を行っていく。

・【データの活用】では、二次元の表から、導いた結論の根拠となる数値を読み取れるよう、視覚支援も取り入れながら表のどの部分に着目すればよいかを考えさせる。また、表に記載されている他の項目について調べるような活動なども、授業展開に組み込んでいく。

◆理科＜概要＞

・「地球」の領域は全国値を上回っている。
・「エネルギー」「粒子」「生命」の領域は全国値と比べて下回っている。
・学力の分布に関しては、平均正答数は全国値を下回っている。

◆理科＜各領域における成果と課題＞

【エネルギー】

・「電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻き数によって変わることが理解できる」は全国値をやや上回っている。
・「乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身についている」は全国値を下回っている。
・乾電池のつなぎ方の中で、特に並列つなぎの特徴と図を関係づけて捉えることができなかった児童がいたと考えられる。

【粒子】

・「水の温まり方について、問題を解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができる」は、全国値を上回っている。
・「水が氷に代わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができる」「水は温まると体積が増えることを根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができる」は全国値を下回っている。

【生命】

・「ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身についている」「レタスの種子の発芽条件について、差異点や共通点をもとに、新たな問題を見出し、表現することができる」は全国値を下回っている。
・日光や肥料などの具体的な条件に着目できているが、種子の発芽に関する問題として適切に表現することができなかった児童がいたと考えられる。

【地球】

・「水の浸み込み方の違いについて結果や問題に対するまとめをもとに、他の条件での結果を予想して表現することができる」は全国値を上回っている。
・「氷がとけてできた水は海に流れていくことの根拠について、学習したことを関連付けて考えることができる」は全国値を上回っている。

◆理科における今後の改善点

・【エネルギー】では、観察・実験の結果を図に整理したり言葉で説明したりするなど、既習の知識と関連付けて理解を深める授業を進めていく。また、ものづくりで行った操作手順を言葉や図に表現するだけでなく、再構成することでより深い理解につなげられるような授業を進めていく。
・【粒子】では、既習の内容を根拠に、問題に正対して予想し、説明できるようにする場面を授業の中で多く取り入れていく。また、そこで学んだことを生活の中に関連付けられるようなオープンエンドな課題設定も積極的に取り入れていく。
・【生命】では、正しく科学的な言葉を使えるように、授業の中で ICT 端末を使って調べたり、図鑑などと照らし合わせたりする学習活動などを取り入れていく。また、児童がすすんで自然の事物・現象に働きかけ、問題を見いだすことができるようにするために、わかったことを比較し、ちがった点や共通点を捉えることで、思考を深められるような学習問題を設定することをすすめていく。
・【地球】では、条件を制御した実験の方法を発想し表現できるようにするために、変える条件や変えない条件に着目し、整理しながら実験を計画する経験を積ませていく。検証計画の立案を教師・教科書主導で行うことで、児童が十分に考えられる活動時間を設け、予想や仮説を基に、条件を制御した場合の結果の見通しについての話合い等を行わせていく。また、観察・実験などの結果を基に、自分の考えを表現できるようにしていく。そのために、結果を整理し、具体的な数値を基に、より妥当な考えをつくりだし、表現できるだけの十分な活動

を保障する授業計画をたてていく。

２．生活習慣や学習習慣等に関する調査の傾向

【学習環境・生活環境について】

・ほとんどの児童が朝食を毎日食べており、同じ時間に就寝・起床できる生活習慣が身に付いている。

【規範意識・自己有用感について】

・自分のよいところに気づき、将来の夢や目標を持っている児童が多く、概ね自分自身を肯定的にとらえている。

・先生は自分のことを認めてほめてくれると感じる児童が多いが、先生に困りごとや不安を相談すると考えている割合は少なくなる。

【学習に対する興味・関心について】

・家庭学習では、平日・休日ともに１時間以上２時間より少ない範囲で勉強机に向かっている。

・大半の児童が学習塾や家庭教師に教わっている。

【国語・算数・理科について】

・授業内容の理解について、概ね「わかる」と答えており、国語が「好き」と答える児童の割合は全国値を大幅に上回っている。一方で、算数では好きじゃない・得意ではないと感じている児童が多い。

・国語の学習については、考えを書くときに目的に応じて書き表し方を工夫している児童が多い。

・算数の学習については、記述式などの自分の考えを書く問題に対しても、最後まであきらめずに取り組もうとしている児童が多いが、どのように考えたかを説明する活動が不足していると考えている割合が大きい。

・読書は好きだが、一日あたりの読書時間が３０分未満の児童が多い。

３．今後の取り組みと改善

本校では、今年度の研究テーマを「主体的に自分の考えを表現できる子どもを目指して～ユニバーサルデザインの視点を活かした授業づくり～」と設定し、算数科の授業を通して、児童が主体的に考えを構築し、表現する力を習得することを目指しています。そのために、児童の「やってみたい」「考えてみたい」という好奇心をかき立てる授業の仕組みを設定するとともに、児童が見通しを持って学習に取り組めるよう、ユニバーサルデザインの視点を取り入れて、授業における児童の「わかる」「できる」を支援する取り組みを行っています。研究・公開授業の後には、よりよい授業づくりの手立てについて職員全体で討議し、各学年でも討議で得た学びを取り入れる方法について意見を交流しています。これらを踏まえ、今回の調査で特に課題となった国語科「話すこと・聞くこと」の領域での「自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる」、「書くこと」の領域での「図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる」に対しては、目標やポイントを絞った交流活動を設定したり、課題に対して多様な視点で考えられるような手立てを用意したりするなど、児童が主体的に話し合いに取り組みながら、表現力や読解力がより高められる授業づくりを目指します。

算数科においては、特に「変化と関係」の領域が全国と比べて課題があります。この領域における「伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができる」という課題に対しては、問題に対する見方や考え方を言葉や式、図、表、グラフなどを用いて表現する時間を積極的に取り入れ、交流を通じて考えを深め合えるようにするなど、指導法の工夫改善に努めていきます。

理科においては、特に「エネルギー」の領域が全国と比べて課題があります。この領域における「○○についての知識が身についているか」という課題に対しては、学習した内容がきちんと定着するよう、授業で取り扱った科学的事象がさまざまな条件下でどう作用するのかを、学年に合わせて比較させたり、多面的に考えさせたりすることで、思考・判断ができるような学習を設定するなど、指導法の工夫改善に努めていきます。

引き続き、児童の主体性を尊重し、成長を目指す力を信じながら、お互いの力を高め合える児童を育成する学校づくりを目指していきます。今後ともご家庭や地域でのご協力をよろしくお願いします。